

令和 7 年 6 月 11 日

大阪市長 横山 英幸 様

地方独立行政法人天王寺動物園
理事長 山中 諄

令和 6 年度の業務実績にかかる自己評価について

令和 6 年度の業務について自己評価を行いましたので、成果や課題などについて、以下のとおり概要を報告します。

【前提】

- 動物園の業務を以下の 3 つの分野に分類し、それぞれ中期目標に示されたあるべき姿を以下のとおり整理した。

分野	あるべき姿（中期目標抜粋）
1 動物園の本来事業	展示動物の充実
	飼育技術の高度化
	種の保存
	施設の整備・適正な維持管理
	来園者の行動変容を促す教育活動
	調査研究の推進
2 動物園の魅力向上	魅力発信の強化
	来園者サービスの充実
3 経営・組織・運営	機動的かつ柔軟な組織体制
	人材の確保・育成
	業務の効率化
	事故の未然防止・迅速な対応
	自己収入の確保
	独法の優位性を活かした経費節減

- 分野ごとの中期目標で示されている姿に近づくべく、努力した点、成果の上がった点、今後の課題などを以下に示す。

1 動物園の本来事業について

① 展示動物の充実

【努力した点や成果】

- 希少動物の導入について、常に国内外から情報収集を行った。
- 既存施設の活用及び展示の教育的効果向上に向け、在来種のチョウゲンボウ及びホンドギツネを導入した。

ホンドギツネは日本人にとって身近な動物であったが、大阪府ではレッドリストに掲載されている絶滅危惧種であり、平成 10 年以降、当園では飼育が途絶えていたホンドギツネを導入することで、子どもたちに対する教育効果向上と、海外からの来園者に人気の高い在来種の展示種増加を図ることができた。チョウゲンボウは猛禽舎の空き獣舎を活用でき、かつ人気動物であり導入によって展示効果を向上させることができた。

また、熊本市動植物園がリニューアル工事のため引き取り先を探していたグラントシマウマ2頭を当園で受け入れる事で、本来群れで生活するシマウマの動物福祉の向上と、シマウマ本来の生態を伝える展示準備が整った。

令和6年1月に発生した能登半島地震で被災したのとじま水族館より、2月にカリフォルニアアシカ1頭を引き受けて飼育し、健康状態を良好に保った状態で、10月にいしかわ動物園(のとじまと同じ運営会社)へ送り返した。また、葛西臨海水族園の改修工事のため、令和6年9月に葛西所有のフンボルトペンギン 98 羽中の 24 羽(預かり6園館中最多)を預かり、令和7年3月に健康状態を良好に保った状態で全羽を返却した。いずれもメディアで大きく取り上げられたことで、当園の飼育技術の高さを証明し、当園に対する信頼を向上させることができた。

【課題】

- 新規希少動物の導入に関して、引き続き取り組んでいく必要がある。

② 飼育技術の高度化

【努力した点や成果】

- JAZA の生物多様性委員会、安全対策委員会、総務委員会、教育普及委員会において、今年度より新たにキリン専門技術員を加えのべ 11 名が種別管理者、専門技術員もしくは部員としての受嘱を継続した。
- JAZA の活動に参加する中で、キリンやマレーグマなど多くの種における飼育管理に関する新たな知見(削蹄技術、同種の中でも生息地による体格差の違いによる繁殖に関する制限など)を得た。また、キリン、カバ、エランドにおける健康管理の手法として BCS(ボディコンディションスコア※)についての情報を入手し、観察記録を開始した。

(※)BCS:見た目と触れた状態から、体型(特に脂肪の付き具合)を段階的に評価したもので、肥満なのか標準なのか痩せているのかの判断基準。

- 動物用飼料(ペレットなど)の製造会社による動物飼料や栄養管理について学ぶ講演会を代理店の協力で当園で平成 28 年以来(他園館ではコロナ禍前に金沢で開催されて以来)の主催で、JAZA 近畿ブロックの園館のオープン参加を呼び掛けた結果、6園館及び1専門学校から 16 名の参加があり、栄養学的な造詣を深める広い人材育成につながった。
- 環境エンリッチメントについて、JAZA の調査研究委員会アニマルウェルフェア研究部第2回シンポジウム「環境エンリッチメントの実践とその評価」に関するワークショップを開催し、当園の動物を対象に、エンリッチメントアイテムの作製を実践し、効果の測定を行った(対象動物 7 種)。他の園館職員とともに環境エンリッチメントアイテムを検討し製作することができ、職員の学びとともに当園の動物福祉向上につながった。

※実践した環境エンリッチメント:動物本来の行動(手先をうまく使う、枝や葉を引き抜く、頭で突くなど)を引き出すフィーダー(採餌器)や嗅覚を刺激する稲わらの設置など。

【課題】

- JAZA の委員会での活動内容や得た知見について、今後も日々の飼育作業における安全性向上や動物福祉の向上に明らかな効果が得られるレベルまで反映・浸透させていく必要がある。
- 飼育技師試験において上級試験への受験者を継続的に輩出し、飼育現場全体での技能レベルアップにつなげる必要がある。

③ 種の保存

【努力した点や成果】

- オグロゾルの人工繁殖に向け、採精手技習得のために頻回で採精試行した。
また、埼玉県こども動物自然公園及び平川動物公園と人工授精を実施するための手順を含む覚書を締結し、当園のオスから採精した精液を当日に輸送し、相手先のメスへ人工授精する手順を整えた。
- オオサンショウウオの保全につながる企画に基づき、大阪府内の域内保全活動(生息地調査)へ継続的に職員が参画し、保全の知識や調査手法の獲得に努めた。
- 希少野生動植物種の取扱いについて、種の保存に資するものとして一定の基準に適合した動植物園等が「種の保存法」の規定により認定される「認定希少種保全動植物園」に令和 6 年 7 月 25 日付で国内 16 園目(令和 7 年 3 月 27 日時点で 24 園)に認定された。これにより、希少野生動物種の個体等の譲渡し等について、原則として規制が適用されないことになり、繁殖等に向けた他園館との個体のやりとりをスムーズに

行うことが可能となり、貴重な血統の二ホンイヌワシの有精卵を譲り受け、当園飼育中のペアに抱卵させることに成功した。

- 令和6年10月からJAZA加盟園館の対象哺乳類の精子保存の受入を開始するため配偶子バンクの受け入れ態勢を整えた(全国で8園館、大学・研究施設では5施設)。加えて、令和7年3月より配偶子(精子)の保存を開始した(全国で4園館、大学・研究施設では5施設)。

【課題】

- 他の繁殖推進種についても繁殖につながるよう、チェックポイントの検証等行い、チェックポイントの項目に基づいた取組を継続していく必要がある。
- 今後も繁殖にも取り組みつつ、生息域内保全につながる啓発活動を継続していく必要がある。

④ 施設の整備・適正な維持管理

【努力した点や成果】

- 令和5年度に発生した動物の逸走事案や他園館における事故を受け、特定動物の獣舎における飼育管理通路への監視カメラ等の設置を行った。

【課題】

- 第1期リニューアル工事にて、大規模な地中障害物(未撤去で存置されたままの旧獣舎基礎など)や図面に記載の無い埋設管等が多数発見され、撤去や移設が不可避となり工期が遅延することとなった。
- 昨今の物価上昇等による整備費上昇がみられたことから、コストダウンを図るとともにリニューアル対象獣舎を一部取止めとする見直しを行った。財源確保を含め、次期工以降の整備対象獣舎及び整備時期(工程)等の再検討が必要である。
- 園内には、図面の無いライフライン(上下水道、ガス、電気・通信)のほか、開園以来更新されていない埋設管の存在も考えられることから、最近多発しているライフラインの老朽化による事故等を踏まえ、ライフラインの調査や図面整備に取り組む必要がある。

⑤ 来園者の行動変容を促す教育活動

【努力した点や成果】

- 教育普及アクションプランに基づき、ディスカバリープログラム、企画展・教育普及イベント、飼育体験講座等を実施し、アンケートにおいて行動変容につながっていることがうかがえる回答を多数得ることができた。特に令和6年8月の企画展「戦時中の動

物園 ～忘れない、繰り返さない、目を背けない～」や令和7年2月のインガメに関する講演会「関西のカメ事情～インガメの楽園はもうないの？～」では8割以上の行動変容がうかがえる回答を得ることができた。

- 教育活動の実施状況は、下表のとおり。

※3月末現在	回 数	参加者数(名)
かんさつじかん	1,234	15,959
ごはん・おやつタイム	1,096	40,592
ディスカバー・プログラム	285	12,010
企画展・教育普及イベント	139	81,671

- ふれんどしっふガーデンの飼育運営管理について、動物専門学校と協定を結び任せている。これは、全国でも例のない形態であるが、専門スタッフやボランティアではなく、専門学校の実習としての位置付けで、学生に基本的な運営を自主的に任せることにより、来園者だけでなく将来を担う人材に対する極めて実践的な学習機会を提供できた。

【課題】

- 通年的に海外からの来園者が多く、海外からの来園者についてはアンケートの回答数に寄与していない実態があるものの、まずペンギン・アシカの生態について学んでもらい、アンケートの集積に努め、教育活動の内容を見直していく。
- ふれんどしっふガーデンについて、当園は管理監督者の立場で指導・助言しており、今後とも来園者・学生双方にとってより良い学習の場となるよう取り組む。

⑥ 調査研究の推進

【努力した点や成果】

- 令和 5 年度に引き続いて飼育各班で動物の飼育管理だけでなく、班として取り組むテーマを決め、研究を進めているほか、外部機関と共同計画を積極的に受け入れて実施した。
※研究テーマ例：動物の繁殖についての取組(複数種)、夜間の行動観察など。
- 天王寺動物園における研究倫理の指針を策定し HP に掲載した。
- 令和6年7月3日の近畿ブロック臨床研究会において「チュウゴクオオカミに対する「安楽殺実施ガイドライン」の運営について」というテーマで発表したところ、ガイドラインを策定していない園館から情報提供依頼があり(文書提供依頼2件、口頭での問い合わせ多数)、当園のガイドラインを情報提供した。
- 令和6年12月17日の全国動物園技術者研究会にて「チンパンジーの逸走事故と事後の対応について」というテーマで発表を行い、ベストプレゼン賞を受賞した。今後、JAZA 動物園水族館雑誌(査読付)に論文を投稿予定である。

【課題】

- 研究を発表や論文等の形で出すまでには一定期間が必要となり、すぐに成果が得られない場合もある。また必ずしもプラスの成果が出るとは限らないため、継続した取組が必要である。

2 動物園の魅力向上について

【努力した点や成果】

- てんしばゲートからのアジアの森拡張エリアへの園路切替えに際しては、当園のメイン園路として利用する大規模な切替えとなることから、無理のない移動ができるよう緩やかな傾斜で整備し、また同園路の鋼板塀(工事仮囲い)については、来園者を飽きさせないよう全面に天王寺動物園の情景写真や動物イラスト等の装飾を実施した。
- 仮チンパンジー舎のスロープの手すりに高温対策のカバーの設置や鋼板塀による動物園の雰囲気を崩さないための動物シールの貼付け、ナイト ZOO 中に安全に観覧いただくための照明の設置等を行った。
- ナイト ZOO では、ゲリラ的に実施する飼育ガイドやおやつタイムに加え、「夜の動物とおき話(※1)」や「トークカフェ(※2)」を各日で実施することでイベントを充実した。また、モーニングズーや子どもユニフォーム撮影会など新たなイベントにも積極的に取り組んだ。特に、ユニフォーム撮影会は非常に好評を得たため、追加開催を行った。
(※1)夜の動物とおき話:動物園スタッフによる夜の動物の生態等についての話
(※2)トークカフェ:お客様からの動物に対する疑問や飼育員の仕事内容などについて、飼育員と獣医師が答える。
- 旧シカ舎を休憩スペースとして開放し休憩場所を増設したほか、園内ベンチの増設を行った。
- 暑さ対策として、新たにホッキョクグマ舎前や鋼板塀にミストを設置したほか、令和 5 年に引き続きスプリンクラーの設置も行った。
- お客様満足度アンケートについて、内容を2項目追加し新たな分析を行えるようにしたほか、多言語版も作成し、令和5年度より約 200 件以上多くのお客様の声を収集した。
- 令和7年1月1日に開園 110 周年を迎え、令和7年には「大阪・関西万博」が開催されることから、令和6年を万博開催前の機運醸成と位置づけ、9月に110周年特設サイト(HP)を開設し、ミyakミyakを登場させるとともに万博公式 HP の案内を行った。また、110周年に向けて、カウントダウンモニュメントの設置、X及びInstagramでカウントダウン投稿を実施した。さらに、令和6年12月からOsaka Metro 御堂筋線にて車内つり革広告、令和7年3月には阪堺電車ラッピング広告を開始するなど、多様なPRを行った。

- 110 周年を迎えた令和7年1月1日を無料開園日とし、園長による記念講演、キリンのハルカスお誕生日会、ハイエースラッピングデザインのお披露目 & 展示会等のイベントを実施した結果、入園者数は2万人を超える盛況となった。また、110 周年オリジナルグッズも好評で売り上げ増につながった。

【課題】

- 園内工事に伴い、園路・獣舎等の案内を頻繁に変更する必要があり、来園者から分かりにくいところのご意見が多く寄せられているところである。園内マップ、園内看板、ホームページをこれまで以上に迅速に変更していく必要がある。

3 経営・組織・運営について

【努力した点や成果】

- 収入確保に向けた取組
大阪メトロ BRT(今里ライナー)と相互送客を目的とした割引券の運用を開始したほか、インバウンド対策として大阪楽遊パスへ参画した。また、シェラトン都ホテルと共同で開発した「アフタヌーンティー」(入園チケット付)などを販売し、当初予定期間より1か月延長するほど好評を得た。
遺贈手続きについて、令和6年11月、三井住友信託銀行と遺贈希望者に対する遺言信託業務の紹介に関する協定を締結した。
- 職員の能力向上と意欲喚起のための取組
インセンティブ制度(業績結果活用型報酬制度・人事評価結果活用型報酬制度・提案型研修制度)を構築・実施した。
- 人材の確保・育成
以下のとおり、国内外から実習生を受入れ、社会的な人材育成にも努めた。なお、海外からの実習生受入れのために英語版の実習生募集要項(Tennoji Zoo Internship Acceptance Guidelines)を作成し、受入れた海外実習生の指導についても英語で実施した。獣医実習、飼育実習、学芸員実習に関しては、近畿の園館の中では受け入れ期間が長く、人数も多い。特に、獣医実習生に関しては JAZA 加盟園に10名以上輩出しており、業界全体の人材育成に貢献している。

	担当課	受入人数	実習期間(各人)
獣医学実習生	動物診療課	海外2名(インドネシア・IPB University) 国内4名(大阪公立大、麻布大、岡山理科大、 宮崎大)	14日間 (8～12月)
学芸員実習生	飼育展示課	19名	5～10日間

			(7～9月)
飼育実習生	飼育展示課	8名	14～30 日間 (6～2月)
動物園実習生	運営課	2名	6～7日間 (8～9月)

- JAZA の会議を複数回分担し開催した。近畿ブロック会議を1件(令和6年度近畿ブロック第2回園館長会議)、全国会議は2件(大都市事務主管者会議および第 36 回大型動物麻酔研究会)をホストとして開催した。

【課題】

- 入園者数・入園料収入ともに予算に比し大幅減となった。主な原因は令和5年度に比べ獣舎のリニューアルオープンがなかったことが影響していると考えているが、今後、更なる誘客に向けた対策を検討する必要がある。
- 令和6年7月、メールを送信した際に、他のメールから流用した本文の削除漏れにより個人情報that漏えいした。その後の研修において改めて個人情報の取扱と管理の重要性を説明したが、今後もさらに個人情報の取扱について注意喚起を行う必要がある。